

**社会福祉施設における福祉教育の  
質的構成要素に関する研究**

会津大学短期大学部

社会福祉学科

外崎 紅馬

# 社会福祉施設における福祉教育の 質的構成要素に関する研究

外崎 紅馬

平成 19 年 12 月 19 日受付

【要旨】 社会福祉における利用者に対する援助は、人としての尊厳や自由、個別の価値の尊重などが基盤になければならない。そのうえで利用者の置かれている生活環境や状況についての適切な判断と福祉ニーズの理解といった専門的知識が必要であり、その専門的知識をふまえて具体的な専門的技術が実践性を備えた援助として展開されなければならない。現在、社会福祉を学習する場として、学校以外に社会福祉施設もその一翼を担っているが、研究結果より、学生は福祉施設での学習内容に实际的に役立つ技術を期待し、福祉施設の教育への役割についても、福祉現場で用いられている実践的な技術や応用の教育としての提供など、学校で学習する基礎的な内容に対して、実践的で応用的な面への期待が高く、一方福祉施設では、利用者と直接的な関わりをもつうえで求められる価値観や心がけなどを学習内容として重要視し、実践的な技術の面よりもむしろ、きちんとした福祉観を形成するという点に教育への役割意識があることを明らかにした。

## 1. はじめに

福祉施設には、さまざまな価値観や生活意識をもった利用者があり、そこで行われる援助は利用者の生活に大きな関わりをもつこととなる。それだけに、利用者の生活は施設職員の価値意識や倫理観に左右されるともいえる。そのため、利用者の権利擁護を第一に考える援助を行うためには、利用者の生活ニーズを適切に判断し、専門知識と専門技術を踏まえたうえで、倫理性の高い実践が展開されなければならない。社会福祉を学習する学生にとって、福祉教育の学習内容やそれに関わる福祉施設の教育的役割がますます問われることとなる。そこで、福祉施設における「学習の質」について検討する。

## 2. 調査の概要

調査は、政令指定都市である宮城県仙台市を調査対象地域とし、仙台市内にある社会福祉施設の職員と、社会福祉系の大学に在学する学生を対象に行った。調査は、まず始めに調査対象施設に、福祉施設に期待される学習の質に関わると思う事柄に対し自由記述式で予備調査を行った。自由記述式で回答を求めた結果、得られた記述内容は多岐にわたるものとなったが、それらの内容を検討、整理すると、「福祉施設での学習内容」「福祉施設の教育的役割」の2つのカテゴリーに分類することができ、高齢者施設及び障害者施設の職員2名と合同協議のうえ、それらのカテゴリーに対する40の下位項目に整理した質問紙を作成した。

### (1) 社会福祉施設

社会福祉施設は、老人福祉施設 84 施設、障害者福祉施設 48 施設、児童福祉施設 18 施設の合計 150 施設を調査対象施設とした。調査方法は質問紙による郵送調査とし、調査対象施設である福祉施設に調査票を配布し、後日郵送により返送してもらい回収した。回収数は老人福祉施設 64 施設、障害者福祉施設 46 施設、児童福祉施設 16 であり、有効回収数 126、そのうち老人福祉施設の無効回答が 2 で、有効回答率は 82.7%であった。また、回答者の属性は、施設長 35、介護職員 52、生活指導員 24、看護職員 13 であり、調査は平成 16 年 8 月 1 日～平成 16 年 8 月 31 日の期間で実施した。

### (2) 学生

学生は、宮城県仙台市にある社会福祉系の大学に在学し、社会福祉士の資格を取得することを目指す学生のうち実習前の 178 人に対し、質問紙による集合調査を実施した。調査票の回収数は全部

で178、そのうち無効回答が12で、有効回答率は93.3%であった。調査は平成16年7月に実施した。

### 3. 結果

#### (1) 単純集計結果

##### 学生

提示した40項目が大切であると思うかという質問に対して、「かなりそう思う」(5点)「ややそう思う」(4点)「どちらとも言えない」(3点)「あまりそう思わない」(2点)「全くそう思わない」(1点)の5件法で回答してもらい、獲得した得点に基づく数値化を図るとともに、それらを集計し、平均値を算出した。40項目の内容および各項目の平均値は表1に示したとおりである。数字は大きいほど大切であると思われることを示しており、最も高い値を示したのは、「利用者の立場にたって考え行動する」(4.89)、「コミュニケーションの大切さ」(4.89)であった。以下高い順に、「利用者 と 接し、利用者から学ぶ」(4.87)、「現場の職員の声や意見などを聞く」(4.87)、「利用者への理解を深める」(4.87)等である。

逆に、最も低い数値を示したのは、「学校での基礎的勉強の確認」(4.28)であった。以下低い順に、「援助過程を教育機関と連携し体験する」(4.45)、「専門性とは何かについて」(4.46)等である。

##### 福祉施設

一方、福祉施設における各項目の平均値を表1に示した。福祉施設で最も高い値を示したのは、「コミュニケーションの大切さ」(4.76)であった。以下高い順に、「利用者の立場にたって考え行動する」(4.72)、「利用者 と 接し、利用者から学ぶ」(4.71)等である。

逆に、最も低い数値を示したのは、「援助過程を教育機関と連携し体験する」(3.94)であった。以下低い順に、「学校での基礎的勉強の確認」(4.04)、「学校で学んだ知識を実践で活用し深める」(4.06)等である。

#### (2) 福祉施設と学生間の検定結果

福祉施設と学生間における項目別平均値の統計的有意差を、t検定により検討した。その結果は表1に示したとおりである。検定の結果、両者の間に有意な差が認められた項目は、全部で39項目であり、有意差がみられなかったのは、「人としての基本的な常識」の1項目のみであった。

両者間での平均値の差が、絶対値で最も大きかったのは、「現場での実践力を身につける」、「よい

援助と悪い援助について知る」である。この絶対値の差は学生の平均値のほうが高く、有意差が認められた項目の学生の平均値は、福祉施設の平均値をすべて上回っている。

### 学習内容

学習内容への期待で有意差が認められた項目は、「人としての基本的な常識」以外の19項目あり、いずれも学生の平均値のほうが高い。

特に、「良い援助と悪い援助について知る」「アセスメント方法」「適切な介助技術」などの絶対値の差が大きく、学生は、福祉施設での学習内容に実際的に役立つ技術を期待していることが伺える。一方、「コミュニケーションの大切さ」「利用者の立場にたって考え行動する」「個人の価値観を大切にすること」「利用者を大切にすること」などの項目はその差が小さいことから、福祉施設では、技術的なことよりもむしろ、利用者との関わりや、その際に求められる価値観や心がけなどを学習内容として重要視しているものと考えられる。

### 教育への役割

福祉施設の学習施設としての教育への役割で有意差が認められた項目は、提示した20項目すべてにみられ、また、すべて学生の平均値のほうが高い。

特に、「現場での実践力を身につける」「現場で求められる技術や知識を教える」「専門性を高める」「学校で学んだ知識を実践で活用し深める」などの絶対値の差が大きく、学生は、福祉施設の教育への役割に対して、福祉現場で用いられている実践的な技術や応用について、学習者に教育として提供する役割を期待していることが伺える。一方、「利用者として接し、利用者から学ぶ」「福祉施設が存在する意味を考える」「学習者の福祉観を深められるようにする」「実践を通して福祉施設のあり方を考える」などの項目はその差が小さいことから、福祉施設では、現場での技術的な実践力よりもむしろ、福祉に従事する者としてきちんと身につけておくべきしっかりとした考え方など、福祉観の形成という点に教育への役割を意識していると考えられる。

## (3) 因子分析結果

### 学生

#### 1) 学習内容

福祉職を目指す学生は学習の場としての福祉施設をどのようにとらえ、そこで得られる学びについて、学習内容に何を期待しているのかという傾向の把握とその構造を分析するために、因子分析

を行った。その際、固有値スクリープロットから5因子が適当であると判断し、主因子法による因子分析を行い、バリマックス法による直交回転を用いて因子解を求めた。その結果は表2に示したとおりである。

さらに、因子分析により検出された5因子についての内的一貫性を、クロンバックの係数を用いて検討したところ、全項目に関しては、 $\alpha = 0.9000$ であり、かなり高い信頼性を示していると考えられる。また、第1因子に関しては $\alpha = 0.8087$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.7810$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.7434$ 、第4因子に関しては $\alpha = 0.7497$ 、第5因子に関しては $\alpha = 0.7231$ であった。このことにより、全体としても各因子別にみても、高い内的一貫性があると確認された。なお、これら5因子による累積寄与率は50.89%であり、因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を参考に各因子の解釈を行った。

第1因子に負荷量の大きな項目は、「利用者はどんなニーズがあるのか」「援助者として何が大切なのか」「よい援助と悪い援助について知る」「どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか」「利用者個々にあわせた援助方法」という5項目である。これは、利用者を第一とした適切な援助を表す尺度であると解釈し、「利用者主体の援助」と名づけた。

第2因子に負荷量の大きな項目は、「施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか」「学校での基礎的勉強の確認」「適切な介助技術」「人を援助するということはどういう事なのか」「アセスメント方法」という5項目である。これは、援助を行うにあたって、それまで学習してきた基本的知識や技術についての理解を表す尺度であると解釈し、「基礎的学習の理解」と名づけた。

第3因子に負荷量の大きな項目は、「利用者の立場にたって考え行動する」「コミュニケーションの大切さ」「利用者を大切にす気持ち」という3項目である。これは、利用者の気持ちへの理解や、接する際の姿勢を表す尺度であると解釈し、「利用者主体の姿勢」と名づけた。

第4因子に負荷量の大きな項目は、「人としての基本的な常識」「専門性とは何かについて」「個人の価値観を大切にす心」「QOL向上のための施設側のとりくみについて」「職業倫理」という5項目である。これは、援助者として身につけるべき職業的な専門性を表す尺度であると解釈し、「専門性の理解」と名づけた。

第5因子に負荷量の大きな項目は、「人としての態度や言葉使い」「尊厳を守るということについて」という2項目である。これは、利用者に対する援助者の基本的な接し方やあり方を表す尺度であると解釈し、「基本的援助姿勢」と名づけた。

学生の回答による因子分析の結果から、「利用者主体の援助」「基礎的学習の理解」「利用者主体の姿勢」「専門性の理解」「基本的援助姿勢」の5因子が導き出された。

## 2) 教育への役割

次に、学生は学習の場としての福祉施設の教育への役割をどのようにとらえているのかという傾向の把握とその構造を分析するために、因子分析を行った。その際、固有値スクリープロットから4因子が適当であると判断し、20項目中、共通性の推定における推定値が0.4以下と低い数値を示した1項目を除外した19項目について、主因子法による因子分析を行い、バリマックス法による直交回転を用いて因子解を求めた。その結果は表3に示したとおりである。

さらに、因子分析により検出された4因子についての内的一貫性を、クロンバックの $\alpha$ 係数を用いて検討したところ、全項目に関しては、 $\alpha = 0.8939$ であり、かなり高い信頼性を示していると考えられる。また、第1因子に関しては $\alpha = 0.8365$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.8135$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.7232$ 、第4因子に関しては $\alpha = 0.7469$ であった。このことにより、全体としても各因子別にみても、高い内的一貫性があると確認された。なお、これら4因子による累積寄与率は49.06%であり、因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を参考に各因子の解釈を行った。

第1因子に負荷量の大きな項目は、「実践的な部分の教育」「現場での実践力を身につける」「現場で求められる技術や知識を教える」「現場でしか体験できないことの体験」「援助過程を教育機関と連携し体験する」「質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする」「実際に体験して知識、技術を身につける」「福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える」という8項目である。これは、福祉の現場に求められる実践的な知識や技術の理解を表す尺度であると解釈し、「実践性の理解」と名づけた。

第2因子に負荷量の大きな項目は、「学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認」「専門性を高める」「実践を通して福祉施設のあり方を考える」「学校で学んだ知識を実践で活用し深める」「福祉施設が存在する意味を考える」という5項目である。これは、学校で学習したことを現場での実践を通してさらに理解を深めることを表す尺度であると解釈し、「現場実践による学習理解の促進」と名づけた。

第3因子に負荷量の大きな項目は、「利用者と接し、利用者から学ぶ」「利用者の人生に関わるという自覚を得る」「現場の職員の声や意見などを聞く」「利用者への理解を深める」という4項目である。これは、福祉の現場で出会う当事者から得られる気づきや学びを表す尺度であると解釈し、「利用者及び現場職員からの学び」と名づけた。

第4因子に負荷量の大きな項目は、「学習者の福祉観を深められるようにする」「学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる」という2項目である。これは、現場体験から今後の学習課題を見つめなおすことを表す尺度であると解釈し、「学習課題の明確化」と名づけた。

学生の回答による因子分析の結果から、「実践性の理解」「現場実践による学習理解の促進」「利用者及び現場職員からの学び」「学習課題の明確化」の4因子が導き出された。

### 3) 学習の質

次に、学生は学習の場としての福祉施設に対し、そこでの学習内容や教育への役割について総合的に学習の質をどのように認知しているのかという傾向の把握とその構造を分析するために、因子分析を行った。その際、固有値スクリープロットから5因子が適当であると判断し、40項目中、共通性の推定における推定値が0.4以下と低い数値を示した1項目を除外した39項目について、主因子法による因子分析を行い、バリマックス法による直交回転を用いて因子解を求めた。その結果は表4に示したとおりである。

さらに、因子分析により検出された5因子についての内的一貫性を、クロンバックの $\alpha$ 係数を用いて検討したところ、全項目に関しては、 $\alpha = 0.9155$ であり、かなり高い信頼性を示していると考えられる。また、第1因子に関しては $\alpha = 0.8927$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.8656$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.8541$ 、第4因子に関しては $\alpha = 0.7460$ 、第5因子に関しては $\alpha = 0.7096$ であった。このことにより、全体としても各因子別にみても、高い内的一貫性があると確認された。なお、これら5因子による累積寄与率は47.00%であり、因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を参考に各因子の解釈を行った。

第1因子に負荷量の大きな項目は、「学校での基礎的勉強の確認」「学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認」「専門性とは何かについて」「施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか」「専門性を高める」「適切な介助技術」「実践を通して福祉施設のあり方を考える」「人としての基本的な常識」「アセスメント方法」「人を援助するという事はどういう事なのか」「福祉施設が存在する意味を考える」「職業倫理」「QOL向上のための施設側のとりくみについて」という13項目である。これは、福祉職に求められる基礎的な学習の理解を表す尺度であると解釈し、「基礎的学習の理解」と名づけた。

第2因子に負荷量の大きな項目は、「利用者の立場にたって考え行動する」「利用者として、利用者から学ぶ」「尊厳を守るということについて」「利用者を大切にしたい気持ち」「利用者の人生に関わるという自覚を得る」「現場の職員の声や意見を聞く」「人としての態度や言葉使い」「利用者への理解を深める」「援助者として何が大切なのか」「コミュニケーションの大切さ」という10項目である。これは、これは、利用者の気持ちへの理解や、接する際の姿勢を表す尺度であると解釈し、「利用者主体の姿勢」と名づけた。

第3因子に負荷量の大きな項目は、「現場での実践力を身につける」「実践的な部分の教育」「現場で求められる技術や知識を教える」「学校で学んだ知識を実践で活用し深める」「実際に体験して知識、技術を身につける」「質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする」「現場でしか体験できないことの体験」「福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える」「援助過程を教育機関と連携し体験する」という9項目である。これは、福祉の現場に求められる実践的な知識や技術



の理解を表す尺度であると解釈し、「実践性の理解」と名づけた。

第4因子に負荷量の大きな項目は、「利用者はどんなニーズがあるのか」「どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか」「利用者個々に合わせた援助方法」「よい援助と悪い援助について知る」という4項目である。これは、利用者を第一とした適切な援助を表す尺度であると解釈し、「利用者主体の援助」と名づけた。

第5因子に負荷量の大きな項目は、「学習者の福祉観を深められるようにする」「学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる」「個人の価値観を大切に作る心」という3項目である。これは、現場体験から自己の福祉観やあり方など、今後の学習課題を見つめなおすことを表す尺度であると解釈し、「学習課題の明確化」と名づけた。

学生の回答による因子分析の結果から、「基礎的学習の理解」「利用者主体の姿勢」「実践性の理解」「利用者主体の援助」「学習課題の明確化」の5因子が導き出された。

## 福祉施設

### 1) 学習内容

福祉施設は学習の場としての施設機能をどのようにとらえ、そこで学生に修得される学びについて、学習内容に何を期待しているのかという傾向の把握とその構造を分析するために、因子分析を行った。その際、固有値スクリープロットから4因子が適当であると判断し、主因子法による因子分析を行い、バリマックス法による直交回転を用いて因子解を求めた。その結果は表5に示したとおりである。

さらに、因子分析により検出された4因子についての内的一貫性を、クロンバックの係数を用いて検討したところ、全項目に関しては、 $\alpha = 0.9475$ であり、かなり高い信頼性を示していると考えられる。また、第1因子に関しては $\alpha = 0.9047$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.8929$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.8280$ 、第4因子に関しては $\alpha = 0.7891$ であった。このことにより、全体としても各因子別にみても、高い内的一貫性があると確認された。なお、これら4因子による累積寄与率は61.58%であり、因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を参考に各因子の解釈を行った。

第1因子に負荷量の大きな項目は、「尊厳を守るということについて」「人としての態度や言葉使い」「利用者を大切に作る気持ち」「コミュニケーションの大切さ」「人としての基本的な常識」「利用者の立場にたって考え行動する」「個人の価値観を大切に作る心」「援助者として何が大切なのか」という8項目である。これは、利用者に対する援助者の基本的な接し方やあり方を表す尺度であると解釈し、「基本的援助姿勢」と名づけた。

第2因子に負荷量の大きな項目は、「利用者個々に合わせた援助方法」「どのような援助を行えば

利用者の満足につながるのか」「適切な介助技術」「利用者はどんなニーズがあるのか」「よい援助と悪い援助について知る」という5項目である。これは、利用者を第一とした適切な援助を表す尺度であると解釈し、「利用者主体の援助」と名づけた。

第3因子に負荷量の大きな項目は、「施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか」「QOL向上のための施設側のとりくみについて」「専門性とは何かについて」「人を援助するということはどういう事なのか」という4項目である。これは、福祉施設の役割やそこでの専門的な取り組みについての理解を表す尺度であると解釈し、「施設福祉の理解」と名づけた。

第4因子に負荷量の大きな項目は、「職業倫理」「アセスメント方法」「学校での基礎的勉強の確認」という3項目である。これは、援助を行うにあたって、それまで学習を積み重ねてきた基本的知識についての理解を表す尺度であると解釈し、「基礎的学習の理解」と名づけた。

福祉施設の回答による因子分析の結果から、「基本的援助姿勢」「利用者主体の援助」「施設福祉の理解」「基礎的学習の理解」の4因子が導き出された。

## 2) 教育への役割

次に、福祉施設は学習の場としての福祉施設の教育への役割をどのようにとらえているのかという傾向の把握とその構造を分析するために、因子分析を行った。その際、固有値スクリープロットから4因子が適当であると判断し、主因子法による因子分析を行い、バリマックス法による直交回転を用いて因子解を求めた。その結果は表6に示したとおりである。

さらに、因子分析により検出された4因子についての内的一貫性を、クロンバックの係数を用いて検討したところ、全項目に関しては、 $\alpha = 0.9272$ であり、かなり高い信頼性を示していると考えられる。また、第1因子に関しては $\alpha = 0.8728$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.8640$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.8248$ 、第4因子に関しては $\alpha = 0.7527$ であった。このことにより、全体としても各因子別にみても、高い内的一貫性があると確認された。なお、これら4因子による累積寄与率は56.64%であり、因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を参考に各因子の解釈を行った。

第1因子に負荷量の大きな項目は、「現場での実践力を身につける」「現場で求められる技術や知識を教える」「実際に体験して知識、技術を身につける」「実践的な部分の教育」「質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする」「現場の職員の声や意見を聞く」という6項目である。これは、福祉の現場に求められる実践的な知識や技術の理解を表す尺度であると解釈し、「実践性の理解」と名づけた。

第2因子に負荷量の大きな項目は、「学校で学んだ知識を実践で活用し深める」「援助過程を教育機関と連携し体験する」「学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認」「専門性を高める」「学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる」という5項目である。

これは、学校で学習したことを現場での実践を通してさらに理解を深めることを表す尺度であると解釈し、「現場実践による学習理解の促進」と名づけた。

第3因子に負荷量の大きな項目は、「利用者の人生に関わるという自覚を得る」「教育機関と共同して豊かな心をもった人を育てる」「福祉施設が存在する意味を考える」「利用者への理解を深める」という4項目である。これは、社会福祉の専門領域に進路を考える者に対する、専門職に求められる意識のあり方を表す尺度であると解釈し、「専門職としての意識」と名づけた。

第4因子に負荷量の大きな項目は、「学習者の福祉観を深められるようにする」「福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える」「現場でしか体験できないことの体験」「利用者と接し、利用者から学ぶ」「実践を通して福祉施設のあり方を考える」という5項目である。これは、福祉現場での学習体験をすることによって、実践から得られる学びを通して自己の社会福祉に対する考えを深めていくことを表す尺度であると解釈し、「福祉観の形成」と名づけた。

福祉施設の回答による因子分析の結果から、「実践性の理解」「現場実践による学習理解の促進」「専門職としての意識」「福祉観の形成」の4因子が導き出された。

### 3) 学習の質

次に、福祉施設は学習の場としての福祉施設における教育機能について総合的に学習の質をどのように認知しているのかという傾向の把握とその構造を分析するために、因子分析を行った。その際、固有値スクリープロットから7因子が適当であると判断し、40項目中、共通性の推定における推定値が0.5以下と低い数値を示した1項目を除外した39項目について、主因子法による因子分析を行い、バリマックス法による直交回転を用いて因子解を求めた。その結果は表7に示したとおりである。

さらに、因子分析により検出された7因子についての内的一貫性を、クロンバックの係数を用いて検討したところ、全項目に関しては、 $\alpha = 0.9644$ であり、かなり高い信頼性を示していると考えられる。また、第1因子に関しては $\alpha = 0.9192$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.8783$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.9015$ 、第4因子に関しては $\alpha = 0.8386$ 、第5因子に関しては $\alpha = 0.8581$ 、第6因子に関しては $\alpha = 0.8312$ 、第7因子に関しては $\alpha = 0.8519$ であった。このことにより、全体としても各因子別にみても、高い内的一貫性があると確認された。なお、これら7因子による累積寄与率は64.01%であり、因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を参考に各因子の解釈を行った。

第1因子に負荷量の大きな項目は、「尊厳を守ることについて」「利用者を大切にする気持ち」「人としての態度や言葉使い」「学習者の福祉観を深められるようにする」「コミュニケーションの大切さ」「援助者として何が大切なのか」「個人の価値観を大切にする心」「利用者の立場にたって考え行動する」「現場でしか体験できないことの体験」「人としての基本的な常識」「職業倫理」とい

う11項目である。これは、利用者に対する援助者としての基本的な接し方やあり方を表す尺度であると解釈し、「基本的援助姿勢」と名づけた。

第2因子に負荷量の大きな項目は、「現場での実践力を身につける」「現場で求められる技術や知識を教える」「実際に体験して知識、技術を身につける」「現場の職員の声や意見を聞く」「福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える」「実践的な部分の教育」「質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする」という7項目である。これは、福祉の現場に求められる実践的な知識や技術の理解を表す尺度であると解釈し、「実践性の理解」と名づけた。

第3因子に負荷量の大きな項目は、「利用者個々にあわせた援助方法」「どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか」「利用者はどんなニーズがあるのか」「適切な介助技術」「よい援助と悪い援助について知る」「アセスメント方法」という6項目である。これは、利用者を第一とした適切な援助を表す尺度であると解釈し、「利用者主体の援助」と名づけた。

第4因子に負荷量の大きな項目は、「利用者の人生に関わるという自覚を得る」「教育機関と共同して豊かな心をもった人を育てる」「福祉施設が存在する意味を考える」「利用者への理解を深める」「人を援助するということはどういう事なのか」という5項目である。これは、社会福祉の専門領域に進路を考える者に対する、専門職に求められる意識のあり方を表す尺度であると解釈し、「専門職としての意識」と名づけた。

第5因子に負荷量の大きな項目は、「学校で学んだ知識を実践で活用し深める」「援助過程を教育機関と連携し体験する」「学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認」「専門性を高める」という4項目である。これは、学校での学習と福祉現場での学習との関係性と連携を表す尺度であると解釈し、「学校教育との連携」と名づけた。

第6因子に負荷量の大きな項目は、「施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか」「専門性とは何かについて」「QOL向上のための施設側のとりくみについて」「実践を通して福祉施設のあり方を考える」という4項目である。これは、福祉施設の役割やあり方、そこでの専門的な取り組みについての理解を表す尺度であると解釈し、「施設福祉の理解」と名づけた。

第7因子に負荷量の大きな項目は、「学校での基礎的勉強の確認」「学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる」という2項目である。これは、現場体験を通してこれまでの学習を確認し、今後の学習課題を明らかにさせていくことを表す尺度であると解釈し、「学習課題の明確化」と名づけた。

福祉施設の回答による因子分析の結果から、「基本的援助姿勢」「実践性の理解」「利用者主体の援助」「専門職としての意識」「学校教育との連携」「施設福祉の理解」「学習課題の明確化」の7因子が導き出された。

#### (4) 因子の整理

##### 学習内容

因子分析により福祉施設、学生双方に共通する因子として、「基礎的学習の理解」「基本的援助姿勢」「利用者主体の援助」の3因子があり、学生側の因子として「利用者主体の姿勢」「専門性の理解」の2因子、福祉施設側の因子として「施設福祉の理解」の1因子がそれぞれ見出されている。

そこで、「学習内容」を構成する要素は、第1因子「基礎的学習の理解」、第2因子「基本的援助姿勢」、第3因子「利用者主体の姿勢」、第4因子「利用者主体の援助」、第5因子「専門性の理解」、第6因子「施設福祉の理解」の6つの因子としてまとめることとする。

##### 教育への役割

因子分析により福祉施設、学生双方に共通する因子として、「実践性の理解」「現場実践による学習理解の促進」の2因子があり、学生側の因子として「利用者及び現場職員からの学び」「学習課題の明確化」の2因子、福祉施設側の因子として「専門職としての意識」「福祉観の形成」の2因子がそれぞれ見出されている。

そこで、「教育への役割」を構成する要素は、第1因子「実践性の理解」、第2因子「現場実践による学習理解の促進」、第3因子「利用者及び現場職員からの学び」、第4因子「専門職としての意識」、第5因子「学習課題の明確化」、第6因子「福祉観の形成」の6つの因子としてまとめることとする。

##### 学習の質

因子分析により福祉施設、学生双方に共通する因子として、「実践性の理解」「利用者主体の援助」「学習課題の明確化」の3因子があり、学生側の因子として「基礎的学習の理解」「利用者主体の姿勢」の2因子、福祉施設側の因子として「基本的援助姿勢」「専門職としての意識」「学校教育との連携」「施設福祉の理解」の4因子がそれぞれ見出されている。

そこで、「学習の質」を構成する要素は、第1因子「基礎的学習の理解」、第2因子「実践性の理解」、第3因子「基本的援助姿勢」、第4因子「利用者主体の姿勢」、第5因子「利用者主体の援助」、第6因子「専門職としての意識」、第7因子「施設福祉の理解」、第8因子「学校教育との連携」、第9因子「学習課題の明確化」の9つの因子としてまとめることとする。

##### 学習の質の整理

学習の質の因子分析によって得られた9つの因子には、「学習内容」と「教育の役割」で得られた因子と同質のものが含まれている。「学習の質」として整理した9つの因子のうち、第1因子「基礎的学習の理解」、第3因子「基本的援助姿勢」、第4因子「利用者主体の姿勢」、第5因子「利用者主体の援助」、第7因子「施設福祉の理解」は、「学習内容」に含まれ、第2因子「実践性の理解」、第6因子「専門職としての意識」、第9因子「学習課題の明確化」は、「教育の役割」に含まれる。「学習の質」として新たに見出された因子は、第8因子「学校教育との連携」の1因子であり、この因子は内容から「教育の役割」に分類することができる。

そこで、学習の質を「学習内容」と「教育の役割」に分け、「学習内容」についてはすでに整理を行った6因子とし、「教育の役割」については、「学校教育との連携」を新たに第7因子として加え、最終的に「学習の質」を構成する要素として、「学習内容」6因子、「教育の役割」7因子、合計13因子としてまとめることとする。

## 4 . 考察

### (1) 福祉施設と教育

調査結果より、学生は福祉施設での学習内容に実際的に役立つ技術を期待し、福祉施設の教育への役割についても、福祉現場で用いられている実践的な技術や応用の教育としての提供など、学校で学習する基礎的な内容に対して、実践的で応用的な面への期待が高い。

一方福祉施設では、利用者と直接的な関わりをもつうえで求められる価値観や心がけなどを学習内容として重要視し、実践的な技術の面よりもむしろ、きちんとした福祉観を形成するという点に教育への役割を意識している。

また、学習内容について因子分析により福祉施設、学生双方に共通する因子として、「基礎的学習の理解」「基本的援助姿勢」「利用者主体の援助」の3因子があり、学生側の因子として「利用者主体の姿勢」「専門性の理解」の2因子、福祉施設側の因子として「施設福祉の理解」の1因子がそれぞれ独立して抽出されている。学生は「利用者主体の援助」について、援助を行うにあたっての利用者に対するあり方とそこに求められる専門性への意識が、「利用者主体の姿勢」「専門性の理解」へとさらに具体化されているといえる。一方福祉施設側は、福祉施設で利用者の生活を支えるということの理解も学習内容として大切であるとの考えが「施設福祉の理解」へとまとまったと考えられる。

さらに、教育の役割について因子分析により福祉施設、学生双方に共通する因子として、「実践性の理解」「現場実践による学習理解の促進」の2因子があり、学生側の因子として「利用者及び現場職員からの学び」「学習課題の明確化」の2因子、福祉施設側の因子として「専門職としての意識」

「福祉観の形成」の2因子がそれぞれ独立して抽出されている。学生は福祉施設で学習を行うことによって、学校では出会えない利用者や現場の職員から知見を得て、そこからさらに自己の学習課題を明らかにしていけるという期待が、「利用者及び現場職員からの学び」「学習課題の明確化」の因子に具体化されているといえる。一方福祉施設では、現場で得られた知見から専門職としての意識を高め、きちんとした福祉観を学生に形成してほしいという期待が「専門職としての意識」「福祉観の形成」に表れたと考えられる。

また、学習内容や教育への役割についての総合的な学習の質に対する因子分析により福祉施設、学生双方に共通する因子として、「実践性の理解」「利用者主体の援助」「学習課題の明確化」の3因子があり、学生側の因子として「基礎的学習の理解」「利用者主体の姿勢」の2因子、福祉施設側の因子として「基本的援助姿勢」「専門職としての意識」「学校教育との連携」「施設福祉の理解」の4因子がそれぞれ見出されている。

社会福祉における利用者に対する援助は、なによりも人としての尊厳や自由、個別の価値の尊重などが基盤になければならない。そのうえで利用者の置かれている生活環境や状況についての適切な判断と福祉ニーズの理解といった専門的知識が必要であり、その専門的知識をふまえて具体的な専門的技術が実践性を備えた援助として展開されなければならない。調査結果から、学生は福祉施設での学習に、実践的な内容を期待する傾向があり、それが、「実践性の理解」「現場実践による学習理解の促進」という因子に表れている。一方福祉施設では、福祉施設で援助を行うということに関し「施設福祉の理解」への期待とともに、実践を行ううえで求められる価値観や心がけなど、「福祉観の形成」を重視している傾向が伺える。

そのような状況のもとで利用者の尊厳やその生活を第一に考える援助を行うには、「基礎的学習の理解」「基本的援助姿勢」という因子に表されるように、社会福祉に従事する者は専門的な知識や技術に対する基礎的な理解をしたうえで、利用者の情緒を重視した心理的支持や安定への配慮、信頼に基づく人間関係を大切にす態度などが必要である。このことは、専門職としての資質を涵養するために、教育に人格の熟成も期待されていることを意味している<sup>1)</sup>。また、利用者の心身の状況や生活の実態に関する情報を把握し、関連する諸制度や各種の社会資源に精通し、それらを利用者のために役立てる技量も求められるため、利用者に対して質の高い援助を提供していくためには、「専門職者としての意識」の維持と「専門性の理解」が求められることから、社会福祉従事者の育成と専門性の修得、およびその向上を図る専門教育が必要である。

近年にみられる急速な少子高齢化の進行は、人々の生活に大きな影響を生じさせ、それに伴って福祉ニーズも多様化してきており、それに対応するためには確かな専門的知識と技術が望まれ、福祉教育についても現実に則した内容が期待されてきている。同時に福祉施設を学習の場として活用し、社会体験を増やすことによって、「利用者及び現場職員からの学び」が得られ、社会福祉の現実

的な課題の認識から「学習課題の明確化」を図るなど、社会福祉の理解を促し深めるための教育や学習の場として、福祉施設の役割が今後の福祉教育の展開には不可欠である。さらに、社会福祉の基礎構造改革により、措置から契約へと利用者本位の制度への転換が進められている現在においては、「利用者主体の姿勢」「利用者主体の援助」等、利用者主体のサービス提供が必須となる。関連する様々な情報を収集し、利用者に対する適切な判断と決定を行う力を養うため「学校教育との連携」による福祉学習の推進と整備は、その重要性を増している。

## (2) 福祉施設と学習の質

学生はふだん学校で基礎的な学習を行っているため、その学習内容が福祉現場でどのように反映されているのかを改めて学習することによって、それまで学んできた基礎的な学習内容についてさらに理解を深められることを期待している。その期待が「基礎的学習の理解」という因子に表れている。その期待に応えるためには、福祉施設と学校との間に教育についての連携が必要であり、その必要性の意識が「学校教育との連携」という福祉施設側の因子に表れていると考えられる。また、学生は福祉現場ではじめて利用者と接するため、利用者に向き合う際の心がまえや姿勢を強く意識することとなる。それが「利用者主体の姿勢」として表れるが、それらの姿勢は「基本的援助姿勢」に支えられ、そこに「専門職としての意識」も不可欠であると福祉施設側には意識されていると考えられる。さらに、福祉施設で学習を行うことによって、施設で利用者を援助するとはどういうことかの理解も促進できるために、「施設福祉の理解」が学習要素として表れている。

福祉施設は、施設内での利用者に対する援助にとどまらず、ボランティア活動の受け入れや、養成教育における実習の受け入れなど、社会福祉への理解や関心の増進等に大きな役割を果たしている。それらの役割は、社会福祉の理解や人材の養成、ひいては施設運営の改善など、福祉施設にとっても大きな意義をもつものであり、地域への福祉施策の展開を考えた場合、福祉施設自身が、施設内処遇のみでなく福祉理解をすすめるための教育の一翼を担う学習や教育の場として機能することが、地域福祉を推進していくうえでも重要である。

また、福祉施設が、福祉教育の責任の下にその機能のある部分を担うとき、学習者は利用者の日常生活そのものの中に学習・教育課題を見つけ、経験や体験など現場実践の学習を通じて、それまで意識していなかった社会福祉の新たな理解を深め、適切な認識、よりよい判断、あるべき行動の仕方等に気づき、それらが動機づけとなり主体的な学習へと発展することとなる。そのため、事前事後に、福祉施設は教育を要請した機関と、教育内容に関する必要な情報の提供や交換を十分にを行い、学習に対する適切な指導の実施が求められる。



## 5. おわりに

福祉施設における学習には、社会福祉に関わる者に必要とされる基本的な価値観や倫理観、知識、技術の修得が期待されるが、福祉施設本来の目的は、利用者が主体的に自らの生活を構築していくことに対する援助のため、この目的を実現するために用いられる知識や技術は、基礎的な専門知識や専門技術に基づき具体化された内容である。そのため、学習にあたっては、多様な福祉現場で価値観や倫理観、基礎的な知識や技術がどのように生かされ、実践としてどのように具体化されているのかを理解することが求められる。

## 引用文献

1) 江草安彦：介護福祉士養成の見直し、介護福祉学、vol1：9 - 11（2004）

## 参考文献

- (1) 原田正樹：福祉教育プログラムの構造とその実践的課題、月刊福祉9月号（1999）
- (2) 阪野貢：今後の福祉教育の展開を考える、月刊福祉9月号（1999）
- (3) 巡静一：生涯学習とボランティア活動、明治図書（1996）
- (4) 瀬沼克彰：生涯学習と地域活性化、大明堂（1998）
- (5) 内海成治：ボランティア学のすすめ、昭和堂（2001）
- (6) 高橋勇悦：高齢化とボランティア社会、弘文堂（1996）
- (7) 小山隆：福祉ボランティア、朱鷺書房（1995）
- (8) 奥田いさよ：社会福祉専門職性の研究、川島書店（1992）
- (9) 久田則夫：施設職員実践マニュアル、学苑社（1996）
- (10) 竹原健二：現代の地域福祉学、小林出版（2001）
- (11) 杉森創吉：福祉サービス開発と職員計画、誠信書房（1981）
- (12) 一番ヶ瀬康子・小川利夫・大橋謙策：社会福祉の専門教育、光生館（1990）
- (13) 仲村優一・三浦文夫・阿部志郎：社会福祉教室、有斐閣（1977）
- (14) 大橋謙策：社会教育と地域福祉、全社協（1978）
- (15) 小松源助：ソーシャルワーク実践理論の基礎的研究、川島書店（2002）
- (16) 大島侑：社会福祉実習教育論、海声社（1985）

表1 単純集計結果(有意差)

カテゴリー	項目	平均値		有意差
		福祉施設	学生	
学習内容	1. コミュニケーションの大切さ	4.76	4.89	**
	2. アセスメント方法	4.12	4.67	**
	3. 人を援助するという事はどういう事なのか	4.53	4.81	**
	4. 利用者個々に合わせた援助方法	4.52	4.83	**
	5. 職業倫理	4.32	4.64	**
	6. 人としての態度や言葉使い	4.62	4.81	**
	7. 尊厳を守ることについて	4.62	4.83	**
	8. どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか	4.51	4.82	**
	9. 個人の価値観を大切にすること	4.64	4.82	**
	10. 専門性とは何かについて	4.27	4.46	**
	11. 人としての基本的な常識	4.49	4.59	
	12. 利用者を大切にすること	4.68	4.86	**
	13. 利用者の立場にたって考え行動する	4.72	4.89	**
	14. 学校での基礎的勉強の確認	4.04	4.28	**
	15. 適切な介助技術	4.25	4.72	**
	16. 施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか	4.35	4.63	**
	17. 利用者はどんなニーズがあるのか	4.54	4.84	**
	18. 援助者として何が大切なのか	4.56	4.84	**
	19. よい援助と悪い援助について知る	4.20	4.82	**
	20. QOL向上のための施設側のとりくみについて	4.19	4.62	**
教育の役割	1. 学校で学んだ知識を実践で活用し深める	4.06	4.57	**
	2. 援助過程を教育機関と連携し体験する	3.94	4.45	**
	3. 実践的な部分の教育	4.24	4.66	**
	4. 現場で求められる技術や知識を教える	4.15	4.76	**
	5. 教育機関と共同して豊かな心をもった人を育てる	4.21	4.68	**
	6. 質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする	4.19	4.57	**
	7. 学習者の福祉観を深められるようにする	4.35	4.61	**
	8. 学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる	4.27	4.66	**
	9. 現場でしか体験できないことの体験	4.50	4.80	**
	10. 現場での実践力を身につける	4.15	4.77	**
	11. 専門性を高める	4.09	4.61	**
	12. 実践を通して福祉施設のあり方を考える	4.23	4.52	**
	13. 利用者と接し、利用者から学ぶ	4.71	4.87	**
	14. 現場の職員の声や意見を聞く	4.40	4.87	**
	15. 福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える	4.17	4.66	**
	16. 学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認	4.15	4.53	**
	17. 実際に体験して知識、技術を身につける	4.38	4.76	**
	18. 利用者への理解を深める	4.56	4.87	**
	19. 利用者の人生に関わるという自覚を得る	4.38	4.83	**
	20. 福祉施設が存在する意味を考える	4.31	4.55	**

\*p < 0.05, \*\*p < 0.01

表2 因子分析結果(学習内容:学生)

項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
<b>第1因子(寄与率 13.37%)利用者主体の援助</b>					
利用者はどんなニーズがあるのか	0.73	0.14	0.23	0.06	0.08
援助者として何が大切なのか	0.67	0.23	0.13	0.07	0.36
よい援助と悪い援助について知る	0.59	0.20	0.01	0.34	0.17
どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか	0.54	0.17	0.31	0.21	-0.10
利用者個々に合わせた援助方法	0.50	0.30	0.26	0.09	0.06
<b>第2因子(寄与率 12.88%)基礎的学習の理解</b>					
施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか	0.22	0.69	0.05	0.14	0.04
学校での基礎的勉強の確認	0.02	0.66	0.00	0.22	0.21
適切な介助技術	0.30	0.53	0.24	0.15	0.12
人を援助するという事はどういう事なのか	0.19	0.51	0.25	0.10	0.20
アセスメント方法	0.30	0.50	0.19	0.25	0.06
<b>第3因子(寄与率 8.96%)利用者主体の姿勢</b>					
利用者の立場にたって考え行動する	0.25	0.04	0.63	0.13	0.39
コミュニケーションの大切さ	0.16	0.27	0.60	0.08	0.06
利用者を大切にする気持ち	0.29	0.06	0.58	0.21	0.21
<b>第4因子(寄与率 8.66%)専門性の理解</b>					
人としての基本的な常識	0.01	0.30	0.28	0.58	0.31
専門性とは何かについて	0.08	0.39	-0.03	0.57	0.30
個人の価値観を大切にする心	0.37	0.03	0.20	0.49	0.04
QOL向上のための施設側のとりくみについて	0.24	0.35	0.21	0.43	-0.11
職業倫理	0.23	0.30	0.10	0.41	0.18
<b>第5因子(寄与率 7.13%)基本的援助姿勢</b>					
人としての態度や言葉使い	0.03	0.31	0.22	0.16	0.63
尊厳を守ることについて	0.35	0.10	0.25	0.20	0.57

表3 因子分析結果(教育の役割:学生)

項 目	因子1	因子2	因子3	因子4
<b>第1因子(寄与率 16.18%)実践性の理解</b>				
実践的な部分の教育	0.74	0.23	0.09	0.02
現場での実践力を身につける	0.69	0.30	0.06	0.00
現場で求められる技術や知識を教える	0.66	0.05	0.13	0.10
現場でしか体験できないことの体験	0.57	-0.03	0.17	0.27
援助過程を教育機関と連携し体験する	0.49	0.25	0.07	0.30
質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする	0.49	0.32	0.06	0.26
実際に体験して知識、技術を身につける	0.46	0.38	0.34	-0.18
福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える	0.41	0.40	0.31	-0.08
<b>第2因子(寄与率 13.76%)現場実践による学習理解の促進</b>				
学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認	0.20	0.69	0.16	0.12
専門性を高める	0.19	0.67	0.11	0.14
実践を通して福祉施設のあり方を考える	0.17	0.57	0.33	0.22
学校で学んだ知識を実践で活用し深める	0.47	0.51	0.05	0.24
福祉施設が存在する意味を考える	0.09	0.46	0.39	0.32
<b>第3因子(寄与率 11.66%)利用者及び現場職員からの学び</b>				
利用者と接し、利用者から学ぶ	0.13	0.05	0.70	0.12
利用者の人生に関わるという自覚を得る	0.11	0.07	0.64	0.15
現場の職員の声や意見などを聞く	0.04	0.17	0.61	0.08
利用者への理解を深める	0.14	0.24	0.52	0.06
<b>第4因子(寄与率 7.47%)学習課題の明確化</b>				
学習者の福祉観を深められるようにする	0.15	0.16	0.21	0.73
学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる	0.20	0.40	0.24	0.56

表4 因子分析結果(学習の質:学生)

項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
<b>第1因子(寄与率 12.83%) 基礎的学習の理解</b>					
学校での基礎的勉強の確認	0.70	0.07	0.06	0.08	0.07
学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認	0.64	0.12	0.32	0.03	0.11
専門性とは何かについて	0.62	0.24	0.09	-0.05	0.23
施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか	0.62	0.07	0.09	0.29	0.13
専門性を高める	0.58	0.09	0.32	0.06	0.09
適切な介助技術	0.57	0.19	0.27	0.35	-0.07
実践を通して福祉施設のあり方を考える	0.56	0.25	0.24	0.16	0.19
人としての基本的な常識	0.48	0.46	0.05	-0.07	0.20
アセスメント方法	0.45	0.21	0.21	0.29	0.24
人を援助するということはどういう事なのか	0.44	0.34	0.09	0.16	0.03
福祉施設が存在する意味を考える	0.43	0.26	0.14	0.22	0.37
職業倫理	0.42	0.22	0.07	0.14	0.28
QOL向上のための施設側のとりくみについて	0.37	0.15	0.12	0.29	0.35
<b>第2因子(寄与率 12.73%) 利用者主体の姿勢</b>					
利用者の立場にたって考え行動する	0.06	0.74	0.19	0.09	0.08
利用者と接し、利用者から学ぶ	0.03	0.66	0.12	0.19	0.14
尊厳を守るということについて	0.20	0.61	0.11	0.11	0.14
利用者を大切にす気持ち	0.08	0.60	0.14	0.21	0.14
利用者の人生に関わるという自覚を得る	0.16	0.59	0.06	0.13	0.15
現場の職員の声や意見などを聞く	0.26	0.58	0.04	0.15	0.01
人としての態度や言葉使い	0.42	0.51	0.15	-0.17	0.02
利用者への理解を深める	0.06	0.51	0.18	0.22	0.21
援助者として何が大切なのか	0.23	0.48	0.15	0.47	0.08
コミュニケーションの大切さ	0.20	0.46	0.04	0.22	0.08
<b>第3因子(寄与率 9.77%) 実践性の理解</b>					
現場での実践力を身につける	0.13	0.10	0.77	-0.11	0.07
実践的な部分の教育	0.14	0.11	0.76	0.09	-0.02
現場で求められる技術や知識を教える	0.04	0.08	0.57	0.28	0.12
学校で学んだ知識を実践で活用し深める	0.40	-0.01	0.55	0.23	0.17
実際に体験して知識、技術を身につける	0.20	0.35	0.55	-0.08	-0.03
質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする	0.24	0.07	0.53	0.07	0.25
現場でしか体験できないことの体験	-0.02	0.21	0.48	0.16	0.29
福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える	0.30	0.28	0.46	0.10	0.03
援助過程を教育機関と連携し体験する	0.31	0.00	0.44	0.22	0.26
<b>第4因子(寄与率 6.20%) 利用者主体の援助</b>					
利用者はどんなニーズがあるのか	0.08	0.34	0.21	0.63	0.21
どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか	0.15	0.30	0.06	0.57	0.12
利用者個々に合わせた援助方法	0.25	0.35	0.12	0.49	0.04
よい援助と悪い援助について知る	0.22	0.34	0.07	0.39	0.38
<b>第5因子(寄与率 5.47%) 学習課題の明確化</b>					
学習者の福祉観を深められるようにする	0.18	0.16	0.15	0.06	0.69
学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる	0.37	0.21	0.26	0.06	0.53
個人の価値観を大切にす心	0.15	0.33	0.15	0.19	0.42

表5 因子分析結果(学習内容:福祉施設)

項 目	因子1	因子2	因子3	因子4
<b>第1因子(寄与率 20.95%)基本的援助姿勢</b>				
尊厳を守ることについて	0.72	0.17	0.13	0.27
人としての態度や言葉使い	0.71	0.14	0.26	0.23
利用者を大切にする気持ち	0.70	0.39	0.23	0.08
コミュニケーションの大切さ	0.65	0.24	0.07	0.17
人としての基本的な常識	0.62	0.14	0.28	0.35
利用者の立場にたって考え行動する	0.60	0.41	0.24	-0.16
個人の価値観を大切にする心	0.56	0.52	0.17	0.13
援助者として何が大切なのか	0.52	0.28	0.36	0.18
<b>第2因子(寄与率 19.53%)利用者主体の援助</b>				
利用者個々にあわせた援助方法	0.26	0.73	0.22	0.20
どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか	0.35	0.72	0.20	0.21
適切な介助技術	0.22	0.64	0.42	0.20
利用者はどんなニーズがあるのか	0.27	0.63	0.20	0.26
よい援助と悪い援助について知る	0.25	0.62	0.28	0.30
<b>第3因子(寄与率 11.45%)施設福祉の理解</b>				
施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか	0.21	0.27	0.70	0.09
QOL向上のための施設側のとりくみについて	0.24	0.44	0.58	0.32
専門性とは何かについて	0.28	0.20	0.52	0.48
人を援助するということはどういう事なのか	0.33	0.30	0.47	0.26
<b>第4因子(寄与率 9.65%)基礎的学習の理解</b>				
職業倫理	0.46	0.30	0.13	0.56
アセスメント方法	0.16	0.46	0.30	0.55
学校での基礎的勉強の確認	0.20	0.42	0.21	0.51

表6 因子分析結果(教育への役割:福祉施設)

項 目	因子1	因子2	因子3	因子4
<b>第1因子(寄与率 16.27%)実践性の理解</b>				
現場での実践力を身につける	0.75	0.15	0.12	0.30
現場で求められる技術や知識を教える	0.70	0.27	0.23	0.25
実際に体験して知識、技術を身につける	0.69	0.24	0.30	0.15
実践的な部分の教育	0.54	0.39	0.42	0.13
質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする	0.49	0.28	0.01	0.46
現場の職員の声や意見などを聞く	0.45	0.14	0.29	0.36
<b>第2因子(寄与率 15.24%)現場実践による学習理解の促進</b>				
学校で学んだ知識を実践で活用し深める	0.08	0.82	0.27	0.05
援助過程を教育機関と連携し体験する	0.24	0.75	0.27	0.11
学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認	0.21	0.73	0.28	0.14
専門性を高める	0.31	0.52	0.01	0.31
学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる	0.37	0.50	0.25	0.32
<b>第3因子(寄与率 13.04%)専門職としての意識</b>				
利用者の人生に関わるという自覚を得る	0.04	0.18	0.78	0.11
教育機関と共同して豊かな心をもった人を育てる	0.30	0.27	0.63	0.11
福祉施設が存在する意味を考える	0.22	0.22	0.60	0.26
利用者への理解を深める	0.20	0.27	0.57	0.30
<b>第4因子(寄与率 12.10%)福祉観の形成</b>				
学習者の福祉観を深められるようにする	0.07	0.28	0.24	0.68
福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える	0.43	0.08	0.00	0.57
現場でしか体験できないことの体験	0.41	0.20	0.15	0.48
利用者と接し、利用者から学ぶ	0.13	0.01	0.17	0.48
実践を通して福祉施設のあり方考える	0.32	0.09	0.30	0.46

表7 因子分析結果(学習の質:福祉施設)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
<b>第1因子(寄与率 13.82%)基本的援助姿勢</b>							
尊厳を守ることについて	0.71	0.04	0.12	0.22	0.06	0.16	0.21
利用者を大切にす気持ち	0.70	0.05	0.42	0.15	0.12	0.16	0.04
人としての態度や言葉使い	0.63	0.13	0.05	0.51	0.23	0.13	0.09
学習者の福祉観を深められるようにする	0.60	0.21	0.05	0.12	0.17	0.24	0.27
コミュニケーションの大切さ	0.60	0.33	0.10	0.10	0.18	0.15	-0.02
援助者として何が大切なのか	0.58	0.12	0.29	-0.01	0.11	0.31	0.19
個人の価値観を大切にす心	0.58	0.19	0.48	0.06	0.16	0.11	0.15
利用者の立場にたって考え行動する	0.58	0.11	0.39	0.10	0.07	0.23	-0.17
現場でしか体験できないことの体験	0.54	0.52	-0.03	0.12	0.12	0.03	0.10
人としての基本的な常識	0.53	0.13	0.13	0.45	0.19	0.20	0.14
職業倫理	0.42	0.19	0.20	0.37	0.08	0.22	0.38
<b>第2因子(寄与率 10.69%)実践性の理解</b>							
現場での実践力を身につける	0.05	0.79	0.13	0.13	0.12	0.13	0.15
現場で求められる技術や知識を教える	0.18	0.66	0.24	0.22	0.17	0.11	0.27
実際に体験して知識、技術を身につける	0.09	0.64	0.48	0.16	0.21	0.06	-0.03
現場の職員の声や意見などを聞く	0.21	0.53	0.18	0.14	0.16	0.26	-0.08
福祉現場の問題点・課題点・評価すべき点を考える	0.21	0.52	-0.02	-0.04	0.04	0.42	0.17
実践的な部分の教育	0.15	0.48	0.21	0.39	0.34	0.16	0.19
質の高いマンパワーを福祉現場に供給できるようにする	0.21	0.47	0.26	-0.06	0.14	0.25	0.43
<b>第3因子(寄与率 10.20%)利用者主体の援助</b>							
利用者個々にあわせた援助方法	0.23	0.17	0.69	0.24	0.23	0.18	0.14
どのような援助を行えば利用者の満足につながるのか	0.29	0.25	0.63	0.21	0.27	0.24	0.05
利用者はどんなニーズがあるのか	0.22	0.20	0.58	0.27	0.21	0.19	0.14
適切な介助技術	0.23	0.15	0.58	0.24	0.18	0.27	0.33
よい援助と悪い援助について知る	0.21	0.19	0.48	0.36	0.32	0.22	0.24
アセスメント方法	0.14	0.23	0.44	0.13	0.14	0.40	0.38
<b>第4因子(寄与率 8.21%)専門職としての意識</b>							
利用者の人生に関わるという自覚を得る	0.23	0.06	0.20	0.74	0.16	0.02	-0.02
教育機関と共同して豊かな心をもった人を育てる	0.03	0.30	0.19	0.61	0.27	0.16	0.11
福祉施設が存在する意味を考える	0.21	0.18	0.28	0.51	0.15	0.44	0.00
利用者への理解を深める	0.48	0.17	0.37	0.49	0.14	0.05	0.11
人を援助することとはどういう事なのか	0.35	-0.04	0.22	0.40	0.13	0.33	0.35
<b>第5因子(寄与率 8.16%)学校教育との連携</b>							
学校で学んだ知識を實踐で活用し深める	0.17	0.04	0.25	0.21	0.77	0.10	0.13
援助過程を教育機関と連携し体験する	0.13	0.26	0.18	0.21	0.76	0.05	0.07
学校などで学んだ基礎的な知識や技術を再確認	0.20	0.16	0.26	0.22	0.66	0.19	0.16
専門性を高める	0.16	0.35	0.03	0.02	0.47	0.31	0.05
<b>第6因子(寄与率 7.74%)施設福祉の理解</b>							
施設が利用者にとってどのような役割を果たしているか	0.20	0.13	0.25	0.15	0.13	0.68	0.03
専門性とは何かについて	0.29	0.18	0.17	0.11	0.18	0.56	0.29
QOL向上のための施設側のとりくみについて	0.24	0.21	0.33	0.16	0.22	0.55	0.35
実践を通して福祉施設のあり方考える	0.28	0.36	0.15	0.17	0.07	0.54	-0.08
<b>第7因子(寄与率 5.19%)学習課題の明確化</b>							
学校での基礎的勉強の確認	0.22	0.34	0.26	0.08	0.36	0.11	0.57
学習者の理解度を確認し、今後の課題を明確にさせる	0.36	0.39	0.21	0.18	0.40	-0.02	0.46